

学術講演

食物摂取に関する研究 その重要性と問題点

東北大学農学部教授

木村修一

食品学・栄養学あるいは生理学等々のそれぞれの分野における研究の発展は、それなりに人間の食物摂取というものをとらえる上での基礎的な知見を提供していることはいうまでもない。

しかしながら、現代社会におけるかくも多様な人間の食物摂取状況とその動向を理解し推定するのに、上記のような既存の個別学の研究でどれだけカバーできるかということになる、きわめて心もとないと云わざるをえない。

人間にはそれぞれ特異的ともいえる食物選択がはたらいており、一方、食物摂取の物質的条件である食物の供給系は、経済的・社会的な法則に規制されて動いている。

したがって、人間における食物摂取をとらえるには、既存の学問的知見を背景にするとはいえ、独自のアプローチの方法が必要であり、人間における食物摂取に関する独自の研究領域があつてしかるべきであると私は考えている。一つの例として、肥満児の増加という問題について考えてみよう。

大多数の肥満児がカロリーの収支決算の過剰によるものであることは栄養学的な測定で容易に理解できる。けれども、その子供がなぜそのような大過剰のカロリー収支になったかという疑問に対する答えを、食物が豊富になったからと、単純に子供と食物との関係から導きだすことはできないであろう。食欲自体がさまざま要因によって影響されるし、運動時間の減少もまたかかわってくるであろう。すなわち、子供の具体的な生活との関連でとらえられなければ、一面的な答しかえられず、肥満児増加の問題の真の解決の方途はでてこないと思われるのである。

人類における食糧危機が叫ばれ、公害の不安におびえながら、人間生存の条件が論ぜられ、人間の生活のあり方があらためて問われている昨今、人間における食物摂取に関する研究の重要性はますます増加することになる。

栄養学をやっている私はつねづねこのような研究領域の必要性を感じているが、こうした研究こそ、家政学に期待できるのではなかろうかと考えている。